中山間及び都市近郊における高校生・20代社会人の生活環境評価の特徴

農村部における若者の生活実態と農村環境の志向に関する研究 その2

THE COMPARISON OF EVALUATION OF LIVING ENVIRONMENT BETWEEN
HIGH-SCHOOL STUDENTS AND YOUNG ADULTS IN RURAL AREAStudy on actual condition of living and the intention of country life
in young generation Part 2

青木秀幸*, 鎌田元弘**, 宮澤鉄蔵***

Hideyuki AOKI, Motohiro KAMATA and Tetsuzou MIYAZAWA

In this paper, from the viewpoint of the life-stage and sex distinction of young generation (high-school students, young adults) in intermediate and mountainous area and suburban area, we analyzed next two matters. One is the relation between evaluation of living environment and factor of attribute, the other is the comparison between young generations and other generation in environmental evaluation.

The main contents of this paper are as follows.

- 1) The evaluation of environment in high-school students is not always influenced by regional characteristics.
- 2) By the age-group and life-stage, the evaluation about interchange of same generation, information and the environment of facilities will change in young generation. This tendency is remarkable in mountain area.
- 3) Young generation have two-peculiarity compared with other generation in evaluation of environment.

One is its characteristic evaluation about the environment of facilities, the other is the common evaluation about the interchange of personnel with other generation.

Keywords : Life-stage, Living environment, Factor of attribute, Significant evaluation, Young generation
ライフステージ, 生活環境, 属性要因, 重要度評価, 若者世代

1. 研究の背景と目的

従来、都市・農村分野における若青年層を対象とした研究では、居住地の移動性の高さから、居住地選択や定住・転出行為に伴う諸要因を研究対象として扱った内容のものが多く報告されてきた。

一方で昭和30年代後半より続いてきた農村からの人口流出が鈍化の兆しにある現今、農村地域の若者の視点を踏まえた環境整備としては、地域の定住人口を増やす生活条件の充足から、現在の地域における暮らしの充実を目指す生活条件の充足が重要と考える。

このような観点に立ち前稿¹⁾では、中山間地域に暮らす高校生を対象に「地域への定住意向」と「生きがい感」の視点から生活実態や生活環境評価の特徴を探り、生きがい度の高低により生活環境評価が異なることや、定住意向の如何によらず生きがい度が高いと自然環境や人的交流などの地域特性を評価することなど、定住意向と環境評価との関連傾向からでは捉え切れなかった評価特性を明らかにした。

本稿では、さらに対象を対象地域在住の若者15～29歳の生活環境評価まで広め、対象者属性間での比較分析から、若者の評価特性を探る。本研究での対象者属性とは、生活についての実態や生活の評価に違いが予想される性別、年齢といった基本的属性や職業、ライフステージ、居住経験といった社会的属性である。

人生のなかで15～29歳の期間は、ライフステージからみても高校の卒

業、進学、就職、結婚といった人生の転機を迎えることが多い期間である。若者はライフステージが変わることで個人が属する社会の中の集団²⁾が、学校や職場、サークルや個人的グループ等範囲や種類が変わり、生活や環境に対する意識も変わることが予想される²⁾。中でも学生と社会人としては、他地域での居住経験や婚姻などの要因を踏まえると生活環境評価において差が顕著になることが予想される。

また基本的属性別の生活実態や生活環境評価については、前稿や既往研究^{3)～6)}から男女間で特性の相異が概観でき、既往研究³⁾から世代間で特性の相違が概観できている。また世代間における生活への共通・個別の意識を明らかにすることは、世代間交流や伝統文化の継承等において有効な指針を得ることに繋がり重要なことだと考える。

よって以上より、本研究の目的は、15～29歳の若者を対象にして、①高校生・20代社会人の比較分析から、若者の生活環境評価の共通性と個別性を明らかにすること、②生活環境評価において壮年・老年世代との比較分析から若者の評価の特性を明らかにすること、の2点とする。

本論に関する研究として、青島ら⁷⁾は、都市近郊型定住の特質を就労および通勤形態から解明し、30歳以下の若青年層帰還の合計量が都市域への近接性に比例して増加することを明らかにしている。また、若者の生活や環境評価を規定するその他の要因は、若者の属性だけでなく、地域の立地や施設環境、地域の社会状況、自然環境等が考えられる⁸⁾。よ

* 千葉工業大学大学院 修士(工学)

** 千葉工業大学建築学科 助教授・学博

*** 千葉工業大学 名誉教授・工博

Graduate School, Dept. of Architecture, Chiba Institute of Technology, M. Eng.
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Chiba Institute of Technology, Ph. D.
Honorary Prof., Chiba Institute of Technology, Dr. Eng.

って本稿では、先行研究の成果^{注3)}を踏まえた上で、中山間地域と都市部近郊地域を事例地として設定し、両地域における対象者属性間の生活環境評価の差異を分析することとした。

2. 研究の枠組みと調査概要

本研究は、図-1に示す枠組みに沿って行う。解析の内容は以下のとおりで、文頭の番号は、図-1中の分析側面に対応する。

- ①立地条件や人口データから若者にとっての対象地の地域特性を概観する。
- ②アンケート調査のデータをもとに、都市近郊と中山間および高校生と20代社会人の視点から男女別に生活環境評価項目に対する重要度の評価を解析^{注4)}、若者の評価特性を明らかにする(なお高校生・社会人といった社会的立場の違いによる属性区分を本稿中では、「若者の世代区分」とする)。生活環境評価の特性を捉えるための分析では、若者の世代区分間・男女間・地域間で共通の評価と個別の評価を抽出する。
- ③さらに、若者の世代区分や地域間で共通の評価に限定して、壮年・老年世代と共通の評価と個別の評価を抽出する。
- ④各分析によって明らかとなった若者の生活環境評価の特性から、若者の環境整備欲求に配慮した計画課題について考察する。

解析の資料とするのは、主にアンケートによる生活環境評価(重要度の評価)である。本稿中で扱うアンケート資料は主に、'93～'97年に実施された3回のアンケート調査によるものである。各調査はそれぞれ、93年6月実施の市原市調査、95年8月実施の市原市・飯石郡の高校生調査、97年9月実施の頓原町の20代若者調査であり、各アンケートが対象とした世代、対象地域は表-1のとおりである。同表中にアンケート回収率および回収票の男女比を記す。

アンケート調査項目は、各調査間で多少異なるが^{注5)}、大きくは基本属性や生活実態に係わる項目、環境評価を捉える環境評価項目で構成されている。市原市調査、20代若者調査におけるアンケート項目の詳細を表-2に示す(高校生調査については前稿参照)。生活環境評価項目に対する評価については、多段階の評定尺度による方法をとっている。

分析の対象としては、「93年調査以降得られたアンケート資料の中から15～29歳の「高校生」「20代社会人」サンプルを取り上げる。本稿ではそれらを若者世代と呼ぶこととする。また若者世代は、年齢、社会的属性、居住地を踏まえて「高校生(中山間)―飯南高校の生徒」「20代社会人(中山間)―頓原町の住民」「高校生(都市近郊)―市原高専の生徒」「20代社会人(都市近郊)―市原市の住民」で構成され、それぞれを対象者グループと称した。なお各対象は各属性を考慮した一事例として扱っており、本稿で明らかにする生活環境評価は、一般的評価を意味するものではない。

3. 対象地の地域概要

<立地>頓原町は県の中央東部に位置し、中国山地の中に開けた東西に細長い典型的な中山間農村である。東は中国山地を境に広島県と接し、西は4町1村と隣接し、最寄りの都市へのアクセスは、広島市へ車で2時間、松江市へ車で1時間の距離にある。交通は、島根県側と広島県側をつなぐ国道54号があるが、鉄道路線はなく路線バスが主要なものである。現地の若者に対してのヒヤリングからは、交通機関の現状に対する不便さ訴えるコメントが目立っていた。一方市原市は、東京からほぼ50km圏にあ

図-1 研究全体の解析の内容と枠組み

表-1 若者実態調査の概要

調査の概要	市原市全域調査	高校生調査	20代若者調査
調査の内容	市原市全域調査	飯南高校・飯石郡飯石町・飯石郡飯石町立飯石高等学校(飯石郡飯石町)	飯石郡頓原町
実施年月	1993年6月	1995年8月	1997年9月
対象地域・学校	千歳市市原市全域	飯南高校・飯石郡飯石町立飯石高等学校(飯石郡飯石町)	飯石郡頓原町
対象者	市原市在住の全世代住民	両校在学中の生徒	飯石郡頓原町在住の若者
アンケート回収率	93世帯/124世帯(回収率:75%, 314票回収)	飯南高校:157票/167票(回収率:94.0%) 市原高専:141/154(回収率:91.6%)	43票/98票(回収率:44%)
男女比	男子:女子=51:49*	飯南高校(男子:女子=52:48) 市原高専(男子:女子=100:0)	男子:女子=42:58

*全世代サンプルの男女比。回収率も全世代サンプル

表-2 アンケート項目の内容

＜基本属性・生活実態に係わる項目＞	
	＜市原市全域調査＞
基本属性:	地域・世代・婚姻・職業(通勤先、所得)・性別・居住歴
個人に関する項目:	集落内の知人数・集落内の同級生数・結婚前の居住地・1日の余暇時間数
生活に関する項目:	近隣の公園充足度・情報機器利用頻度・定期購読雑誌数・車利用頻度・外食頻度
世帯に関する項目:	家族人数・敷地面積・延床面積・個室数・宿泊可能な人数・テレビ台数・集落内の親戚数・車保有台数
	＜20代若者調査＞
基本属性:	性別、年齢、住所、仕事、居住歴、婚姻
個人に関する項目:	友人の数、余暇時間数、余暇の過ごし方、情報源の利用頻度、生きがい度
生活に関する項目:	友人との関係、車の保有台数・利用頻度
世帯に関する項目:	住まいの広さ
＜環境評価を捉える項目＞	
環境評価項目:	A. 集落での生活について[10項目]、B. 住宅について[5項目]、C. 仕事について[7項目]、D. 集落の環境について、E. 集落の施設・整備・情報について
その他意向:	A. 生活について[14項目]、B. 住宅について[5項目]、C. 環境について[11項目]、D. 施設・情報について[14項目]、E. 仕事について[9項目]、F. 生活の情報源(情報の質・量)[9項目]

(注)高校生調査については、前稿で報告している為、ここでは省略する。

図-2 年齢階層別人口(頓原町・市原市)

り、千歳市へは電車で15分、東京へは1時間の時間距離にある。さらに圏央道、東京湾横断道路の整備から、遠隔地域とのアクセスも向上している。市域は東京湾から房総丘陵にかけて東西22km南北に36 kmにも及び、

首都圏では横浜に次いで大きい。

＜人口動態・構成＞頼原町の人口は、平成4年の時点で3,302人、世帯数は922世帯であり、世帯・人口ともに減少しつづけている^{注6)}。一方市原市の人口は、平成4年の時点で265,002人、世帯数は90,430世帯であり、世帯・人口ともに増加傾向を示す。地域の世代数・人口の増加率を見ると、市原市は昭和55年から平成4年にかけて世帯が1.4倍、人口が1.2倍となり、人口増加に加え都市化の進展に伴う核家族化が進行している。人口動態では、頼原町は高齢化を反映して、社会減・自然減が目立つ。図-2の人口ピラミッドを見ると市原市が40～50歳にピークがあるのに対し、頼原町は55～64歳にピークがあり高齢化の進行が読み取れる。また若者については頼原町で10代後半から20代が最も少ない年齢層となり、20歳代の人口は216人(全人口の6.7%)に過ぎない。頼原町の面積が124.6km²と広大であるため若者の密度(1km²当たりの20代若者の人数=1.7人)は相当低く、若者にとって必要な活気や若者同士の交流や情報交換はほとんど期待できない状況と言える。

表-3 基本集団のサンプル数

(サンプル数:人)

地域	世代区分	高校生	20代社会人
飯石郡頼原町(中山間)	男子	81人	18人
	女子	76人	25人
男女比(男子:女子)		(52:48)	(42:58)
市原市(都市近郊)	男子	141人	20人
	女子	0人	21人
男女比(男子:女子)		(100:0)	(49:51)

図-3 志向レベルの設定

表-4 高校生の居住体験、親の農業従事者の状況

(数値:%)

	他地域での居住体験 生まれてからずっと現在の集落に住んでいる	以前は違うところに住んでいた	親の農業従事者			
			農林業	サラリーマン・公務員・団体職員	自営業	その他
高校生(男子/中山間)	81.9	18.1	4.1	66.2	23.0	6.8
(女子/中山間)	84.9	15.1	10.0	57.1	30.0	2.9
(男子/都市近郊)	56.3	43.7	1.5	70.0	18.5	10.0

表-6 対象者グループの生活環境評価(重要度)

中央値以上の項目

	飯石郡頼原町(中山間)								市原市(都市近郊)								項目
	高校生 (飯南高校)				20代社会人				高校生 (市原高専)				20代社会人				
	男子		女子		男子		女子		男子		男子		女子				
	「大変重要 だと思う」(%)	志向レ ベル	「大変重要 だと思う」(%)	志向レ ベル	「大変重要 だと思う」(%)	志向レ ベル	「大変重要 だと思う」(%)	志向レ ベル	「大変重要 だと思う」(%)	志向レ ベル	「大変重要 だと思う」(%)	志向レ ベル	「大変重要 だと思う」(%)	志向レ ベル			
	中央値	標準偏差	中央値	標準偏差	中央値	標準偏差	中央値	標準偏差	中央値	標準偏差	中央値	標準偏差	中央値	標準偏差			
a.生活について	[29.2]		[36.4]		[49.8]		[50.0]		[26.6]		[33.6]		[39.9]				
a1.安心して付き合える仲間が多い。	65.8	④	69.9	④	76.5	④	83.3	④	53.0	④	61.1	④	71.4	④	a1		
a2.自宅で家族と過ごす時間が多い。	27.0	①	36.8	②	44.4	③	58.3	③	22.0	①	15.8	①	38.1	②	a2		
a3.生活を親戚、近隣の人に干渉されない。	20.5	①	35.8	②	55.6	④	62.5	④	17.9	①	33.3	②	52.4	③	a3		
a4.地域の組織に強制的に入れさせられない。	18.1	①	38.2	②	33.3	②	41.7	②	20.0	①	35.3	②	28.6	①	a4		
a5.若者が集まる場、新たな出会いの場がある。	27.1	②	27.3	①	66.7	④	45.8	③	30.0	②	50.0	③	28.6	①	a5		
a6.若者のサークルがある。	13.2	①	18.8	①	55.6	④	25.0	②	13.8	①	27.8	②	30.0	①	a6		
a7.親兄弟から自立した生活ができる。	32.9	②	28.1	②	16.7	①	33.3	②	29.3	②	11.8	①	30.0	①	a7		
b.住宅について	[34.9]		[31.5]		[18.5]		[33.3]		[35.8]		[33.3]		[36.5]				
b1.広い庭が持てる。	31.0	②	19.1	①	22.2	①	43.5	③	28.3	②	33.3	②	23.8	①	b1		
b2.個室、趣味の部屋などが持てる。	43.2	③	49.3	③	11.1	①	34.8	②	46.0	④	44.4	③	33.3	①	b2		
b3.内装やインテリアを自由に換えられる。	30.6	②	26.2	①	22.2	①	21.7	①	33.1	③	22.2	①	52.4	③	b3		
c.環境について	[42.9]		[50.5]		[42.6]		[54.3]		[37.9]		[48.2]		[61.1]				
c1.思い出の多い地で、住みやすい環境である。	45.9	③	44.3	③	33.3	②	39.1	②	48.4	④	47.4	③	57.1	③	c1		
c2.騒音や振動に悩まされることがない。	54.7	④	64.3	④	38.9	②	69.6	④	46.6	④	73.7	④	76.2	④	c2		
c3.四季を感じるような景観がある。	44.4	③	44.3	②	61.1	④	69.6	④	34.5	③	47.4	③	71.4	④	c3		
c4.コンクリートやアスファルトではなく、土と緑に囲まれた広 い空間がある。	38.4	③	45.7	③	44.4	③	39.1	②	35.0	③	42.1	③	47.6	③	c4		
c5.新鮮な畑の野菜が気軽に手に入る。	37.5	③	54.9	④	38.9	②	56.5	③	27.4	②	26.3	①	47.6	②	c5		
c6.夜に女性が安心して歩ける。	36.2	③	49.3	③	38.9	②	52.2	③	35.5	③	52.6	④	66.7	③	c6		
d.施設について	[40.1]		[50.6]		[43.7]		[41.6]		[34.4]		[38.1]		[44.9]				
d1.いつでも誰でも使えるスポーツ施設、美術館、広場のよう な日常生活施設が充分ある。	39.1	③	50.8	③	41.2	③	13.6	①	32.4	③	72.2	④	81.0	④	d1		
d2.専門的な知識を得る機会、情報がある。	32.3	②	38.5	②	47.1	③	54.5	③	24.1	②	42.1	③	42.9	②	d2		
d3.ファッションに関する情報が知れわたっている。	29.9	②	46.9	③	17.6	①	18.2	①	22.2	②	10.5	①	38.1	②	d3		
d4.電車、バスなどの交通が便利である。	47.8	④	65.2	④	52.9	④	77.3	④	45.9	④	73.7	④	70.0	④	d4		
d5.有名コンビニエンスストアがある。	48.5	④	45.5	③	47.1	③	45.5	③	45.1	③	36.8	②	42.9	②	d5		
d6.個性のある専門的な店がある。	35.3	②	43.9	②	47.1	③	22.7	②	25.5	②	21.1	①	33.3	①	d6		
d7.最新の雑誌、書籍、CDなどが容易に手に入る。	53.7	④	63.6	④	52.9	③	59.1	④	45.7	④	42.1	③	42.9	②	d7		
e.仕事について	[29.7]		[36.3]		[42.4]		[30.0]		[26.9]		[46.7]		[60.5]				
e1.収入が多い。	64.0	④	65.2	④	76.5	④	77.3	④	61.7	④	63.2	④	76.2	④	e1		
e2.農業以外の就職口がある。	49.3	④	62.3	④	41.2	②	22.7	①	44.4	③	68.4	④	76.2	④	e2		
e3.安定した農業ができる。	12.7	①	19.4	①	41.2	②	22.7	①	11.2	①	38.9	②	55.0	③	e3		
e4.農業に関する情報が得られる。	9.9	①	13.4	①	29.4	①	18.2	①	5.2	①	26.3	①	38.1	②	e4		
e5.女性にも負担のかからない農業である。	12.5	①	20.9	①	23.5	①	9.1	①	12.1	①	36.8	②	57.1	③	e5		

表-7 対象者グループと各種評価の名称

グループング用語		各種評価の名称	集合円の各部	共通評価の内容
すべての対象者グループ	若者世代	→ 「若者世代」の共通評価	【A】	4対象者グループの共通評価
	若者世代(男子or女子)			
地域毎、世代区分毎の対象者グループ	若者世代(中山間)	→ 「若者世代(中山間)」の共通評価	【C1】	2対象者グループの共通評価
	若者世代(男子or女子/中山間)			
	若者世代(男子/都市近郊)	→ 「若者(都市近郊)」の共通評価	【C2】	2対象者グループの共通評価
	高校生(両地域) …男子のみ	→ 「高校生(両地域)」の共通評価	【D1】	2対象者グループの共通評価
	20代社会人(両地域)	→ 「20代社会人(両地域)」の共通評価	【D2】	2対象者グループの共通評価
対象者グループ -基本集団-	20代社会人(男子or女子/両地域)			
	高校生(男子/中山間or都市近郊)	→	個別評価	対象者グループの個別評価
	高校生(女子/中山間)			
	20代社会人(男子/中山間or都市近郊)			
	20代社会人(女子/中山間or都市近郊)

重要度評価における若者世代の共通性と個性は、まず表-6中の志向レベルから、中央値以上の評価(レベル③④)と以下の評価(①②)とした上で、評価傾向を対象者グループで比較することとした。なお、本稿では、若者の世代区分、地域を考慮した対象間で同傾向の評価を「共通評価」、各対象特有の評価を「個別評価」と称している。

図-4, 5の集合円は、各評価項目に対する若者世代の「共通評価」「個別評価」を視覚的に整理したものである。

考察にあたって、各対象者グループや集合円中の各エリアの内容は、「地域」「若者の世代区分」の視点から表-7のように設定した。なお、「若者世代の共通評価」については1節で考察し、2節では地域や若者の世代区分の視点によって捉えられる対象間の「共通評価」「個別評価」について考察する。

4-1 若者世代の共通評価

若者世代の共通評価からは、以下のような特徴が伺えた。

<若者世代(男女)の共通評価>若者世代は男女ともに、「d4.交通が便利である」や「e1.収入が多い」といった生活の基礎的な要素に加え、「a1.仲間が多い」の人間関係に係る項目を重要視する傾向にある。その一方で、「a4.地域の組織に強制させられない」「a7.自立した生活が出来る」「e4.農業情報を入手できる」こと等の重要度は低い。

<若者世代(男子)の共通評価>若者世代の男子は、「c3.四季を感じるような景観がある」「c4.土と緑に囲まれた広い空間」といった緑豊かな自然環境や「d1.日常生活施設が十分ある」「d7.最新のCDが簡単に手に入る」といった施設・店舗の充実性を重要視する一方で、「d3.ファッション情報が知れわたっている」といった施設・情報のファッション性や「e3.安定した農業ができる」「e5.女性にも負担のかからない農業である」といった農業の就業環境についての評価が低い。

<若者世代(女子)の共通評価>若者世代の女子は、環境に関する事柄でも「c2.騒音や振動に悩まさない」「c6.夜に女性が安心して歩ける」のような安全や公害を重要視するに対し、「a6.若者のサークルがある」「d6.個性のある専門的な店がある」に示される若者サークルや店舗の個性などは重要度が低い。

以上の特徴を踏まえると、概ね若者世代の共通評価は、仲間が多い、交通が便利といった私生活に関わる要素を重要視する側面が強く、その反面地域の組織への強制や自立した生活といった社会生活に関わる要素をあまり重要としない側面が伺える。つまり、生活環境評価において若者世代に共通なのは、私生活に関わる環境に偏りがちなことで、社会生活に関わる要素が自分とはあまり関係ないものとして捉える傾向にあることである。

4-2 地域別・若者の世代区分からみた共通評価と個別評価

前節では、若者世代の共通評価について、図-4, 5の中心部分の評価について考察し、そこから読み取れる特性をまとめた。本節においては、地域毎、世代区分毎の2対象者グループ間の特徴比較を分析の基本とした上で^{注8)}、まず共通評価、個別評価の特性を明らかにし、さらに生活環境評価における地域(居住地)要因や世代区分要因について考察する。

(1) 共通評価の特徴

表-7で設定した地域・世代区分における対象者グループ間の共通評価(B1～D2)に属する項目は、男子で「3対象者グループにみる共通評価(B1, B4)」「20代社会人(男子)の共通評価(D2)」若者世代(男子/中山間)の共通評価(C1)」に現れ、女子で「20代社会人(女子)の共通評価(D2)」、「若者世代(女子/中山間)の共通評価(C1)」に現れている(図-4, 5)。評価の内容は、20代社会人(両地域)で、同世代交流や学習・技術の習得、干渉の拒否といった明確な目的に即した項目を重要視している。これは現在おかれている社会的な立場や地域での生活事情によるものと考えられる。

(2) 個別評価の特徴

表-7で設定した地域間・世代区分間における対象者グループの個別評価(I～IV)について、世代区分毎の地域別の対象者グループ、地域毎の世代区分別の対象者グループに以下の評価特性が伺える。

a. 地域別にみた若者の評価傾向

<高校生>高校生(男子)では、重要度評価にほとんど差が生じておらず、地域的な条件の違いによる相違がない。共通の評価傾向をもつ項目は、「若者世代の共通評価」を含めると、13項目にも及び、生活環境に対して画一的な認識をもっていると言える。高校生段階では、日常が学校生活中心で、放課後や週末においても自宅や友達の家といったように居場所が限定され、地域社会への接点がなく、環境に対する意識も希薄化している状況が伺える。

<20代社会人>20代社会人(男子/中山間)の評価は、個別評価が多くみられる。その内容としては、a2・a3・a5・a6・d6の生活面、施設・情報面を重要視し、同世代交流の機会や場に対する評価で志向レベルが高い。これは職場中心の生活を送るなかで、地域のなかでは同世代の接触さえまもらない状況を、何とかしたいとする20代社会人(男子/中山間)の強い意志を反映したものと考えられる。またその一方で他世代や地域社会から生活を「干渉されない」ことについても、志向レベルが4と高い。「d2」「d6」の施設・情報面については、個性・専門性といった量よりも質的側面を志向している傾向が伺える。この評価と対極にあるのは、高校生(両地域)と20代社会人(男子/都市近郊)の共通評価(c1・c2・c6, b2・

e2)で、公害がなく・安全である環境や嗜好に即したプライベート空間の確保、進路選択の可能性といったものを重要視する評価である。

以上より、20代社会人の共通評価でみられた「明確な目的に即した項目を重要視する」傾向は、中山間といった地域的な特徴が要因となっていると言える。それは、「情報・施設の内容」「同世代交流」に対する評価に現れている。特に同世代交流については地域内における若者の密度の低さやそれに伴う活気のなさ、若者同士の交流や情報交換の少なさを反映しているものと考えられる。

また20代社会人(女子/中山間)の評価は、生活面、施設・情報面を重要視し、同世代交流の機会や場に対する項目に「四季を感じるような景観がある」といった項目が加わってくるのが男子に比べて特徴的である。これに対し20代社会人(女子/都市近郊)は、b3・c1・c4・d1・e2・e3・e5と環境面を重要視すること、仕事面・地元産業(農業)を重要視することが特徴となる。

以上より、中山間(女子/20代社会人)が同世代交流を重要視する傾向は、中山間といった地域的な特徴が要因となっていると言える。これは、20代社会人(男子/中山間)で観察できたものと同様である。よって20代社会人(中山間)では、同世代交流に対する施策が性別を問わず重要であると言える。

b. 若者の世代区分からみた若者の評価傾向

<中山間>まず高校生(男子/中山間)には「畑の野菜が気軽に手に入る」「有名コンビニを利用できる」等の気軽さを志向する傾向がみられる。一方20代社会人(男子/中山間)では「専門的な知識を得る機会、情報がある」「若者が集まる場、新たな出会いの場があること」等の専門性や交流機会を志向するなど、傾向が異なる。

高校生(女子/中山間)では「施設・情報のファッション性」を重要視するような都市性志向の評価をしている。一方20代社会人では施設に対する機能や機会を重要視するような専門性・機会志向の評価に特徴がみられる。若者世代(女子/中山間)では、高校生段階から環境の安全性(c2, c6)についての重要度が高く、それが20代社会人になっても変わらず高いことが、若者世代(男子/中山間)と異なる点である。

<都市近郊>高校生(男子/都市近郊)では、「内装やインテリアを変えられる」「有名コンビニを利用できる」を重要視するような気軽さの評価に特徴がみられる。20代社会人(男子/都市近郊)では「専門的な知識を得る機会、情報がある」「若者が集まる場、新たな出会いの場があること」等の専門性や交流機会を志向する傾向がみられる。これらの傾向から、若者世代(都市近郊)の評価は、世代区分間において述べた特徴は見られるものの、世代区分の差による評価に大きな相違がないことが特徴となっていることが判る。この点では、若者世代(男子/中山間)の評価と大きく異なる。これは高校生から社会人へライフステージが移行する場面における他地域での居住体験の有無が、その一要因として考えられる。他地域での居住体験は若者が自分の住む地域を再認識する上で役立つものと考えられる。

5. 壮年・老年世代との比較にみる若者世代の共通評価の特徴

ここでは前章までで明らかとなった「若者世代の共通評価」が、若者世代特有なものなのか、壮年・老年世代と共有しているものなのかを検証する。

分析は、まず対象を「若者世代の共通評価」(男子14項目、女子10項目)

【中央値以上の項目】

(注)括弧内の数値は、優先度レベルを示す。数値と属性の対応は以下のとおり。
項目no. (飯南高校—飯南高校20代社会人—市原高校—市原高校20代社会人)

図-4 若者世代(男子)の共通・個別評価

【中央値以上の項目】

(注)括弧内の数値は、優先度レベルを示す。数値と属性の対応は以下のとおり。
項目no. (飯南高校—飯南高校20代社会人—市原高校—市原高校20代社会人)

図-5 若者世代(女子)の共通・個別評価

目)に限定したうえで、世代間における共通の評価と個別の評価を抽出し、若者世代の評価特性を明らかにする。

分析で対象とする社会人20代データと壮年・老年世代アンケートデータは'93年市原市全域調査で実施されたアンケートからのものである。世代別の有効サンプルを表-8に示す。20代社会人(都市近郊)データは、

若者世代の代表として用いており^{注9)}、20代社会人(都市近郊)と同地域在住の壮・老年世代データ間の比較分析を行った。なおここでの分析は、あくまでも壮年・老年世代の一事例データとの傾向比較から、共通評価(若者世代)の相対的な特性を明らかにするものであり、世代毎の共通評価の比較を意図したものではない。

ここでは、「大変重要だ」の%の差より、若者世代と壮年・老年世代とを比較した。なお表-8から察せられるように、各世代間のサンプル数に開きがある為、ここでは偏差得点(Z得点)^{注10)}を用い、評価値を基準化した。評価特性は、散布図を用いて観察し、考察は散布図にプロットされた評価項目の中から、若者世代の各属性において共通の評価傾向にあった項目(黒塗り)に限定している。散布図は、縦軸を若者世代の評価、横軸を壮年・老年世代の評価とし、項目別の標準得点を男女別にプロットしている(図-6, 7)。図中の斜線は各属性上位の評価を観る上で基準となる。また、両世代間の評価(「大変重要だ」)のカテゴリー比率で、検定より5%有意水準で差が認められた項目については、図中の項目番号を四角で囲んでいる。また表-9は、「若者世代の全体評価(男女)」と「壮年・老年世代の評価」との評価の高さを整理したものである。

散布図より20代社会人(都市近郊)と壮年・老年世代を男女別に比較すると、世代間の差は、男子よりも女子で顕著に現れていることが判る。項目別の分布では、男女ともに「d. 施設・情報について」の項目が斜線より上側に位置し、斜線より下側には、「c. 環境について」「e. 仕事について」の項目が目立つ。女子の施設・情報に対する評価が壮年・老年世代に比べて特化している。さらに「若者世代、若者世代(男子)(女子)の共通評価」の状況から以下のことが判る。

<若者世代の共通評価>a1・d4・e1について、壮年・老年世代の評価と比較すると、いずれも若者世代が壮年・老年世代を上回る。特に「d4交通が便利である」については、壮年・老年世代との有意差が確認されており、日常生活における若者特有の移動性の高さや他地域(都市側)への志向を反映した評価であることが考えられる。

<若者世代(男子)の共通評価>d1・d7の施設・店舗の充実に対する評価は、壮年・老年世代を上回る傾向にあるものの、c3・c4の緑豊かな自然環境については、壮年・老年世代が若者を上回る評価をしている。高い世代になると自然環境に対する評価も高まる傾向がみられる。e3やe4・e5においても同様の傾向が伺える。自然環境・就業条件(農業)に関して、世代別の視点でみた若者世代全体(男子)の相対的な評価の低さは特徴の一つと言える。この理由として自身や両親が農林業への従事している割合が低いことが考えられる。

<若者世代(男子)の共通評価>c2・c6の環境に対する評価は、壮年・老年世代を上回る高い評価となる。また「d6. 個性のある専門的な店がある」については、若者世代全体(女子)の評価自体は低いものの、壮年・老年世代の評価を上回る評価となり、有意差も検証されている。これらの結果、あるいは散布図の傾向からも「d. 施設について」の項目に対する評価は、若者に特徴的な評価の一つと考えられる。

また、その他の傾向として、散布図-6, 7中のa1・c2といった項目に対する評価は、若者世代と壮年・老年世代ともに高く、両者で差がない。すなわち「親しい友人」「思い出の多い、豊かな自然環境」に対しては、世代間で共通の認識にあると言える。

以上、「若者世代の共通評価」(男子14項目、女子10項目)について、壮年・老年世代の評価に対する位置付けが明らかとなった。

表-8 世代別サンプル数

(単位:人)

	20代社会人(都市近郊)(18~29歳)	壮年世代(30~64歳)	老年世代(65歳~)	合計
男子	20	100	28	148
女子	21	99	28	148
合計	41	199	56	296

※全サンプル(314)から、18歳以上学生データ(13)や年齢・職業の条件不足による不明データ(5)を削除。

図-6 若者世代(男子)と壮年・老年世代の環境評価

図-7 若者世代(女子)と壮年・老年世代の環境評価

表-9 世代間における評価の高さ

○世代間で有意差が明らかでないもの、有意水準95%

	志向レベル③④		志向レベル①②	
	(若者世代上位)	(壮年・老年上位)	(若者世代上位)	(壮年・老年上位)
<若者世代の共通評価>項目	a1, d4, e1	—	(a4)	(a4), a7, e4
<若者世代(男子)の共通評価>項目	d1, d7	c3, c4	b1, d3	(e3) e5
<若者世代(女子)の共通評価>項目	c2, c6	—	(d6)	a6

※(a4)は、男女で世代間上位の傾向が異なる

6. まとめ

本稿では、農村地域に暮らす若者世代を対象に、若者の世代区分や男女、世代別の視点から、若者の生活環境評価に係る特徴を明らかにしてきた。主要な結果をまとめると以下のとおりである。

○高校生の男子では中山間、都市近郊に共通して「生活環境の安全性」「自然環境の豊かさ」「就業条件」への重要度が高い。高校生の環境に対する意識は、地域特性に左右されない。

○20代社会人(男子/中山間)(女子/中山間)が共通して重要とするのは、「情報・施設の内容」「同世代交流」である。また、20代社会人(女子/中山間)が重要とするのは四季を感じる「景観」である。

高校生(男子)では、重要とされた「生活環境の安全性」「就業条件」に対して、20代社会人(男子/中山間)は、低い評価である。

○若者世代(都市近郊)の高校生と20代社会人の評価特性の変化は、中山間に比べて小さい。地域を再認識するような機会(他地域での居住体験など)が少ないことが影響していると考えられる。

○20代社会人(男子)が重要とする「情報・施設の内容」は、「知識として自分の身につくような」「専門性を有する」情報である。また同世代交流の「きっかけ」に対する評価は、女子とは内容が異なるものである。

○若者世代と壮年・老年世代を比較した場合、「安心して付き合える仲間が多い」ことに対する評価は、性別、世代を問わず高く、共通している。これに加え女子では、「思い出の多い環境、四季を感じる景観」に対する評価が各世代に共通して高い。若者世代は、施設環境に対する評価が壮年・老年世代に比べて特化しており、女子においてその差が顕著である。

以上から、生活環境整備において考慮すべき点を以下に示す。

①中山間地域側では、20代社会人を対象とする同世代交流の機会を創出することが重要だと考えられる。特に女子は、特に若者があつまる「場」があることを重要としており、決められた組織やプログラム、見慣れた顔ぶれを好まざる場合もあることを考慮する必要がある。

②若者に対して、専門技術の取得機会や情報取得等に関する積極的な対策が重要と考えられる。特に中山間男子の仕事面に関する技術や知識の提供、女子の自然環境に関する知識の提供等が有効である。これらは、情報網の整備等により中山間地域においても十分可能であろう。

③高校生や都市近郊の20代社会人の画一的な環境認識を改善するためには、高校生のうちから地域との関わりを促進させる対策が必要となり、一時的な他地域への転出者にも地域との関わりを持続させ、常に地域に目を向けさせる為の方策の検討が必要と考える。

④若者世代と壮年・老年世代とが同じ認識を持ち、なおかつ強く志向する環境要素を世代間における交流のきっかけとして位置付けることも重要と考える。女子においては、四季を感じる豊かな自然環境がこれにあたる。

謝辞:本研究を進めるにあたり、調査にご協力頂いた(社)農村生活総合研究センターならびにアンケート調査にご協力いただいた島根県立飯南高等学校、市原高等技術専門校の教職員および生徒の方々、頓原町・市原市20代の成人の方々に、記して感謝申し上げます。

<参考文献>

- 1) 青木 秀幸 鎌田 元弘 宮澤 鉄蔵：中山間地域における高校生の生きがい指標と定住意向からみた生活環境評価—農村部における若者の生活実態と農村環境の志向に関する研究 その1—, 日本建築学会学術研究論文集 524号, pp177~184, 1999年10月
- 2) 鈴木 康平・松田 惺ほか14名：現代青年心理学, 有斐閣, 1987年4月20日初版第1刷発行
- 3) 青木 秀幸 宮沢 鉄蔵 鎌田 元弘 林 賢一：農村地域における若者世代のライフスタイル—その1. 地区別・世代別比較—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道), pp421~422, 1995年8月
- 4) 青木 秀幸 林 賢一 鎌田 元弘 宮澤 鉄蔵：高校生からみた居住環境および生活情報の実態と評価—山間地域および都市近郊地域の比較から—, 1995年度日本建築学会関東支部研究報告集, pp349~352, 1996年3月
- 5) 青木 秀幸 鎌田 元弘 宮澤 鉄蔵：高校生からみた居住環境および生活情報の実態と評価—part2 同地域内における男女生徒の比較より—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿), pp425~426, 1996年9月
- 6) 青木 秀幸 岡林 美紀 鎌田 元弘 宮澤 鉄蔵：高校生の生活環境および生活情報への評価に関する研究, 農村計画学会学術研究発表会要旨集, pp93~96, 1997年4月
- 7) 青島 縮次郎 片田敏孝 越野 実雄 加藤 真一：農山村における都市近郊型定住の進展とその特質に関する実証的研究—愛知県東三河山間地域を事例として—, 第22回日本都市計画学会学術研究論文集22号, pp316~324, 1987年
- 8) 藍沢 宏：農村居住者の生活環境評価による地域類型, 日本建築学会学術研究論文集 331号, pp84~93, 1983年9月

<補注>

- 注1) 複数の個人の集合で、構成する個人間に、ある程度持続的な相互依存関係が存在する場合。
- 注2) 著者は、「現代青年心理学」²⁾のなかで、青年期(15~25歳)における集団と個人の問題を説くなかで、青年期には、青年個人の態度や行動を決定する際、家族や親の影響力が低下し、同年配の友人や仲間の影響が急激にますなど、影響を及ぼす集団が変化することを指摘している。
- 注3) 千葉県市原市を対象とした著者らの先行研究³⁾などでは、生活環境評価において、①都市近郊・中山間といった農林業センサスの定義による同一市内の地域間の評価には大きな差が生じないこと。②若者世代では、従来の集落や旧村といった領域を超え「車で行ける」範囲で居住環境を捉えていること。等を確認している。
- 注4) 地域の生活環境に対する選好を相対的に順序づける尺度として重要度を用いた。
- 注5) 各アンケート調査は、対象地の環境条件、社会状況、対象者属性等を考慮した。調査項目は、市原市における20才代の男女10人及び頓原町に住む20才代の男女8人に対するヒヤリング調査を参考とした。環境評価項目の内容は同一のものを使用している。
- 注6) 人口・世帯の数値は、それぞれ住民基本台帳からの引用である。
- 注7) 志向レベルといった評価の捉え方をとるのは、重要度の評価尺度が異なり(‘93年市原全域アンケートは、評価を3段階の評価尺度で探っているのに対し、‘95‘97年のアンケート調査では、評価を5段階の評価尺度で探っている。)、単純な比較が出来ないことを考慮しているためである。
- 注8) 図-4中、「3属性にみる共通評価」の解釈は、各対象の評価(各評価%を、標準得点で基準化したもの)・志向レベル等の評価特性を考慮し、男子の「b2・c1・c2・c6・a2」を同節(2)-a中、<20代社会人>で記述し、「d5」を同節(2)-b中、<中山間>で記述する。女子については、市原側の高校生サンプルがないことから、図-4中「c1・c4・d1・e2」以外の項目から評価の傾向を考察する。
- 注9) データの引用は、1) 壮年・老年世代のデータが同調査によるものである為、若者世代(厳密には、20代社会人(都市近郊))データの条件(地域、調査年次)を同次元に合わせることを意図したこと、2) 93年市原市全域調査のみが他の調査と異なり生活環境に対する3段階尺度からの評価データを得ていること、の2点を考慮している。
- 注10) 標準得点(Z得点)=(固別値-平均値)/標準偏差

(1999年9月10日原稿受理, 2000年4月12日採用決定)